

---

**シアワセだったよ。**

なーさん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

シアワセだったよ。

### 【Nコード】

N4581F

### 【作者名】

なーさん

### 【あらすじ】

主人公は普通のそして明るい中学2年生。シアワセの日々だったけどある日シアワセがとたんに消えシアワセがなくなる。シアワセの日々を取り戻そうとするけど・・・？

## 第一話 明るかった頃

第一話『まだ明るかった頃』

私は鷹山鈴奈♪メツチャ明るい中学2年生。

タタタタタタ・・・

「おはよ」

「おはよあ」

この子は私の大親友の美奈。小学校から仲いいの！

「んじゃあ早く行こうよ！」

「遅れといてそれあり〜!？」

「ゴメンゴメン」

美奈が顔の前に両手を出して謝った。

とたんに笑いがこみ上げてきた。

「アッハハ」

「なによあ」

「イヤごめんなんでもない」

「えー・・・。」

「何でもないって早く学校いこ」

「うん」

いろんなことを話してゆつくりと学校へ行つた。

学校へ行くといつもどおり皆に挨拶・・・。

ガララ・・・

「おはよお」

んでからゆつくりと席に着く。

そこでは真奈美って子と席が隣だ。

「おはよお」

真奈美に向かって挨拶した。

「おはよ」

無愛想に挨拶を返してくれた。

家族も仲良くて友達もいっぱいいて。

皆から「明るいね」って言われて・・・私は毎日がシアワセだった

よ。

第一話  
—  
e  
n  
d  
—

## 第二話

### 第二話『家族旅行』

「きりーっ！れい！」

「有難うございました。」

「じゃあ皆怪我無いように楽しい夏休みおくってください！」

「はい」

今日から夏休み♪正確に言えば明日から夏休みだけど・・。

「鈴奈く帰るよ」

「あっうん！」

明日から始まる夏休みに胸を弾ませて美奈のところまで一気に走った。

「じゃあね♪バイバイ」

教室にまだいる友達に声をかけて私は歩き出した。

タタタ・・・

「楽しみだね。夏休み」

「そだね あつそだ鈴奈って予定あつたりする？」

「うーんと……。」

何かあつたつけなと手帳を開ける。

「あつ。明後日から一週間家族旅行だあ」

「いいなあ……。」

「えへへ」

「どこ行くん？」

「なんかねえ……沖縄」

「えー。ずるいー!!」

「いいでしょお」

「むー……。」

美奈が羨ましそうにこっちを向いた。

「じゃあ美奈はどっか行かへんの？」

「うん……まだ分かんないけど……。」

「そっかあ……。」

「うん・・・」

長い間無言になった・・・。

「あっねえねえ」

「何？」

「あのねこの頃変なんだよ」

「何が？」

「夜ねお母さんとお父さんの声が聞こえてね。ちょっと盗み聞きしたの」

「盗み聞きって鈴奈らしい」

えへへと私は笑った。

「そしたらね・・・。へんな」ト言っの『鈴奈はシアワセなのかしら』

って・・・。

「シアワセ？」

「うん。」

「お父さんはどう返事したの？」

「それは・・・ちょっと頭混乱しちゃってさ。返事聞いてない。」

「ふーん・・・」

「でね次の日聞いてもね。何のことかしらって・・・。」

「鈴奈さあ夢じゃないの?！」

「あーそうかな」

根っから明るい私は無駄なことは考えないでおこうと思った。

だって私はシアワセだもん。自分に言い聞かせた。

「何か暗くなっちゃったね」

「ゴメン！私がこんなこと言っただから」

「いいよお」

「じゃあ・・・夏休み明けに会おうね。」

「うん！バイバイ」

「ただいまああ!!!!」

「お帰り」

「ねえねえ家族旅行って沖縄だよな」

「そうよ」

「わーい」

「楽しみだわ」

「私も」

「明後日の準備してらっしゃい」

「うん！」

ダーーーーー・・・

私は速いこと準備を済ませてベットの上に寝転がっていた。

ガチャ

お父さんだ！

私は急いで階段を駆け下りた。

「おかえりなさい」

「ただいま。いつもありがとな」

「えへへ」

沖縄の事言ってくれると思ったのに意外にもお父さんは何も言わずリビングに行った。

夕食の時間になると明後日の話題を私が出した。

「ねーお父さん♪明後日ホントに行くんだよね沖縄」

「す．．．」

「何？お父さん」

「すまんが鈴奈明後日は父さん仕事が入って．．．行けなくなった。」

「そつか．．．。」

「あつてもな。奈良行こう！」

「いいよ。仕事忙しいでしょ？」

「すまない。。」

今『シアワセ？』って聞かれたら私はこう言う。

確かに沖縄行けなかったのは悲しかったけどちゃんと理由お父さん言ってくれたから

嬉しかったよ。それに夏休み家族でいられてシアワセだったよ。

第二話－END－

## 第三話

### 第三話『秋』

中学二年生の秋。

「秋だねえ・・・」

私は美奈のほうに向かってボソツと呟いた。

「ん？何かいった？」

「うつん。なんでもない」

「ふーん」

次は移動教室だ。美術室に私たちは急いで行った。

「キーンコーンカーンコーン」

「有難うございました!!」

「ねえ・・・。次ってさ何の授業だったけ」

「えーと・・・あれだよ」

「何美奈。あれって」

「・・・。あつそうそう『道德』」

「あー・・・。何すんだろうね」

「んー・・・。」

「あつあれかな！？もうそろそろでさ。見学行くじゃんか」

「あゝ。」

「楽しみだよね」

「うん。絶対一緒に組もうね」

「もちろん」

「キーンコーンカーンコーン」

「ヤバイ！！ベルなったじゃん」

「走るで！」

そう言って私と美奈は走り出した。

ダダダダダ！！！！

「ああー。セーフだよっ」

クラスメイトのレナが言ったとおりまだ先生は来てなかった。

「よかったあ」

息をつくと同時に先生が来た。

「座れー！！！」

「はっ・・・はい！」

ついビクリして声がうわずる。

「えーと・・・この時間は工場に見学に行くときの班を決めます。」

キヤアアア。喜びの歓声が起こった。

「じゃあまず好きな人と組になってごらん。」

はい！！

「美奈。一緒になる！」

「もちろんだよ」

「あの・・・」

声がしたからくるつと後ろを向いた。

そこに立っていたのはちよつと暗めの相田美羽だ。

頑張って声をかけたのだろう少し体が震えている。

「私も。一緒に組んでもいい?」

「いいよ。ねっ」美奈

「もちろんOKだよぉ」

「ホント?」

美奈と一緒にOKマークを作って見せた。

「有難う」

「はいそこまで!!!」

先生の声が響いた。

組んだ結果。女子は綺麗に一組3〜4人程度になった。

男子も同じ風になっていた。

「んー。じゃあ。男子と女子混合にするからな!」

えー!。と言う声が上がったが「まあいいや」っと言う人もいた。

「あみだするから班の中のリーダーこい!」

「リーダー誰にする?」

私は美羽と美奈に聞いた。

「んー……。玲奈したら？」

「えー。」

「美羽はどう思う？」

美奈ったら喋ったの初めてなのにもう呼び捨てにしている。

「私も玲奈ちゃんがいいと思う。しっかりしてる……。から」

「もお。美羽ったら玲奈でいいよ。」

「ほんと？」

「うん！」

「あつ私の事も美奈でいいから！」

「うん！！」

美羽の顔に笑顔が生まれた。

「じゃあリーダーは玲奈ね」

「もおしょうがないなあ」

「じゃあリーダーになったヤツこい！」

「はい」

私は駆け足で先生のほうに行った。

美羽と美奈が何か話しているのが何となく聞こえた。

タタタ。

「あみだしてきたよお♪」

「うん！いい人となったらいいね」

うんうん。と美羽がうなずいている。

「皆席に着けよ！」

あみだの結果発表がされた。

結果は・・・ハッキリ言って静かな人ばかりがいる男子と一緒に  
なった。

ーキンコーンカーンコーンー

「あつ鳴ってしまったな。じゃあ今日はコレで終わり！皆帰って  
いぞ！」

秋は新しい友達もできてシアワセだったよ。

ーENDー

## 第四話

### 第四話『冬』

ピピピ！…！…ピピピピピピ！…！…！

「んもぁ…。。うるさいなぁ」

目覚まし時計が鳴っている。でも布団から起き上がる気はさらさら  
ない。

「玲奈！…！おきなさいよ」

んもぁ！…！朝からうるさいな！

そう思いながら私は布団から起き上がった。

何！このさぶさー！

「玲奈起きたのぉ？？」

階段の下からお母さんの声が聞こえた。

「うん。起きたよ」

お母さんに聞こえるぐらいの声で叫んだ。

朝ごはんを食べて髪の毛整えて…。。と。

準備完了！

「いってきまゝす」

「あつちよつとまちなさい！」

「なに？お母さん」

「外雪降ってるでしょ！マフラーと手袋つけていきなさい」

「はい」

「ほら。早く」

「せかさないでお」

そう言つて部屋においてあるマフラーと手袋を持つていった。

「んじゃあ行つて来るね」

「いってらっしゃい」

ガチャ

うつ・・・さぶいよお

雪が積もっていて雪のじゅうたんみたいのができていた。

歩くとサクサクツて音がして気持ちいい。

冬は大好きだ。さぶいけど雪が大好きなんだ。  
ガラッ。

教室をあけると暖かい空気が流れ込んできた。  
マフラーと手袋をはずしていすに座った。

「おはよ 玲奈」

「あっ！おはよお美奈」

「ゴメンネ。今日一緒に行けなくて」

「いいよお。先に来る用事があつたんでしょ」

「うん。ちょっとね。でもさ。明日は一緒に行けるから」

「うん」

そう言って笑って見せた。

「あの・・・おはよう。」

「あつ美羽ジャン！おはよお」

「あつ美羽のマフラーかわいい」

美奈が羨ましそうに美羽のマフラーを見つめた。

確かに美羽のマフラーはかわいい。

黄色とオレンジ色の毛糸でチェック柄の柄模様になってるようだ。

「ほんとだ・・・かわいい」

つい私も意見を述べた。

美羽はエヘへと笑っていた。

「どこで買ったの？」

美奈が聞く。

「実は。。手作りなの」

えっ！！私と美奈が声をそろえていった。

「メツチャ器用じゃん」

「ホント！器用〜」

「あのね・・・実は。」

「何?!?!」

「はい。」

美羽が袋から取り出したのはマフラーだ。

一つは青と水色の毛糸で作った美羽と同じチェック柄のようなマフラー。

もう一つは赤とピンクの毛糸で作ったこれも同様チェック柄のようなマフラーだ。

「あげる。」

「え？」

私は聞き返した。

「あのね……。友達になったシルシ。こっちが美奈で。」

美奈に渡されたのは水色と青のマフラーだ。

「ホントに？アリガト♪明日からつけるね。絶対！」

私たちの顔には笑顔が生まれていた。

「そして……。ね。これが玲奈の。。。」

私に渡されたのは赤とピンク色のマフラー。

「アリガト。私も明日から付けるね！」

「うん!!」

笑いあっているとき美羽の袋から何かが落ちた。

「またもやマフラーだ。次は黒色の・・・」

美羽は慌ててマフラーを隠した。

「何〜。今のマフラー。」

美奈が聞いた。

「えっと・・・あのね。お父さんの誕生日プレゼント。」

「へ〜。」

美羽って意外としっかりしてるのかも。

ピンポンパンポン

「生徒の皆さんは今日の一時間目は外で遊びましょう。」

嘘〜！！やったあ〜。

みんなの歓声が上がった。

教室にいた皆は駆け出して外に行った。

「ねえ。外いこー!!」

美奈が嬉しそうに言った。

「いくいく!!」

「ね。美羽もいこ」

「うん。」

私たちは外に向かって走り出した。

皆で雪合戦もしたり雪だるまを作ったりもしたね。

私はあの時シアワセだったよ。ずっと笑ってたよ。

教室で・・・今この学校の変化も知らずに・・・。

ずっと笑ってたね。皆で笑ってたね。

第三話 | e n d |

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4581f/>

---

シアワセだったよ。

2010年12月21日14時20分発行